

## 近畿病院図書室協議会第116回研修会（事例・研究報告会）

研修部

日 時：2008年3月28日（金）10：00～12：00

場 所：ペアーレ神戸

プログラム：

1. 「親と子のとしょかん」3年目をむかえた入院児向け図書提供  
演者：大阪府立母子保健総合医療センター  
中村雅子氏
  2. 患者図書室の構想と立ち上げ  
演者：鳥根県立中央病院 高橋真由美氏
  3. 国外における一般市民への医学情報提供の現状（文献的考察）  
－病院図書室における現状－  
演者：京都桂病院 神山貴子氏  
共同演者：若杉亜矢氏、山室真知子氏、  
杉本節子氏
  4. 定期的な見計らいの試み  
演者：三菱京都病院 井上智奈美氏
  5. 受入資料の装備を主とした当院図書室業務の見直し  
演者：関西労災病院 寺澤裕子氏
- 参加者数：34名（会員33名、会員外1名）

今回の事例・研究報告会には5題の演題が寄せられた。うち研究助成制度を利用した研究成果報告は1題であった。今年度の研究活動は4班が承認されていたが、1班は今後の研究を継続するものの今年度は活動休止となり、残り3班のうち2班は研究報告をするまでにいならず、班員からの他の事例報告をもって今年度の研究報告に代えることとなった。

第1席は「親と子のとしょかん」立ち上げから現在にいたる経過報告である。病児へのサー

ビスという他の病院図書館とは若干趣の異なった環境にあっても、資料の選定、場所・人員の確保など、山積する問題の解決にあたる姿勢には図書館員として共感をもてた。

第2席は患者図書室構築報告である。コンセプトとして、良質な信頼できる医学的情報の提供があげられた。昨今患者図書室開設へ向けての動きが増えてきたが、場所・人員・サービス内容など、検討し解決すべき要件が多く、実際に開室するまでにはなかなかいたっていない。そんな中、比較的短い時間で計画し、オープンにこぎ着けたことには敬意を表したい。また、コピー不可、貸出不可、インターネット設置無し、という制約のなかでの運営もひとつの方法と考えられた。

第3席は昨年引き続き「国外における一般市民への医学情報提供の現状（文献的考察）」研究班からの報告である。この研究班では各研究員が関連文献を検索し、翻訳、検討を加えている。今回は、米国の病院図書館における医学情報提供の形を中心とした内容を詳細に紹介された。また、事例は少ないものの、ニュージーランドや香港における資料も紹介された。アメリカは一般市民への医学情報提供の先進国であり、それだけに図書館員に求められる専門性も高く、不断の努力が必要といえる。まだまだ専門職としてみなされていないわれわれも、常にスキルアップを図ることが必要であると再認識した。

第4席は、図書室サービスの一つの事例である。定期的に見計らい図書を展示することによって、実物を確認した上で購入するかどうか

決定できるため、効率的な選書に結びついている様子がよくわかった。また、書店になかなか行けない職員へのサービスとしても好評であるようで、図書室へ足を運ぶ動機としても働いていることから、他の図書室でも参考にできるのではないかと考える。

第5席も日常業務に基づいた報告である。図書室業務を見直し、データベース作成などの作業や、文献検索に関する業務についての紹介であった。会誌「病院図書館」でも連載記事として紹介されたことがある図書館の小物を使った実例など、日常業務の参考になる報告であった。

今年度の事例研究報告では、患者へのサービス提供と日常業務に直結する報告であった。病院の意向に従わざるを得ない実状と担当者の思いの乖離が時にはあるものの、利用者（職員であれ、患者であれ）の要求に応じてこそ専門職と言えるのではないだろうか。また、業務のちょっとした工夫が利用者に喜ばれることでコミュニケーションを深めることができ、仕事をする上での励みにもなるのではないかと思う。多くの病院図書館が厳しい状況にあるが、今回の研究発表が少しでも存在意義を見出すための参考になればと考える。

(文責：社会保険神戸中央病院／林 伴子)

